
チェルノブイリと君と。

立花 凛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チエルノブイリと君と。

【Nコード】

N7397P

【作者名】

立花 凜

【あらすじ】

十年前に起こった原発事故で封鎖された地域、通称「チエルノブイリ」で暮らす十七歳の主人公、小林を巡る物語。

原発事故以降、チエルノブイリは完全封鎖されて、中から人・物が出ることは一切禁止された。逃げ出そうとした者たちはすぐに殺される。俺の友人の吉木のように。

物資は軍によって配給される。その物資の中に含まれる薬「ドニム」が、放射線に満ちた世界の中で唯一生き残るための命綱だった。

吉木の死からすぐ、若者たちのリーダーである友人の松本は脱走を企てていた。ほとんど不可能であろうその計画は、しかしどうしようも無く動き出してしまふ。

そして時を同じくして、国家反逆罪を犯した少女がチエルノブイリに連行されてきた。ドニムを持たずに。声帯を潰され喋れない彼女に課されたのは、放射線による苦痛と死だった――

第一章「M i s s t o p i a」1

床に散らばるコンクリートの破片を踏みながら歩く。ちいさな破片が碎ける小気味好い音がした。色褪せたミントグリーンの螺旋階段、その上にあるステンドグラスは碎け散ってもう見る影もない。そこから差し込む光が、かつてこの豪邸に住んでいた人の生活の跡を照らしていた。美しい風景。ホルガを構えてシャッターを押す。

「そろそろ帰ろうぜ」

開け放された扉の向こうから松本の声が聞こえた。相当苛々しているらしく、彼の声には酷く棘があった。触れたら一瞬で指を貫通してしまいそう。

「そうだな」

まだ見ていたかったけれど、手に持っていた硝子玉を仕方なく放り投げて、探索を切り上げる。

「特に面白いものは無かったよ。」

廃墟から外に出ると、扉の横の壁にもたれ掛かって松本が煙草を吸っていた。思わず顔をしかめる。煙草は嫌いだ。匂いだとか煙ったさだとか、とにかく全てが神経を逆撫でするのだ。

「こんなボロボロの廃墟にいいもんなんざあるわけねえだろ。」

松本が指に挟んだ煙草を俺の顔の前に突き付けて、不機嫌そうな声でぼやく。煙が身体を内外から犯して行くような感覚。俺は耐えきれなくなつて数歩後ろに退いた。

「えらく機嫌が悪いな。」

たった十分程なのに何故そこまで怒るのか、理解出来無かった。しかし、俺の問いを聞いた松本は更に顔を歪めて「クソつたれが」と吐き捨てる。

「吉木が殺されたつてのによく平気な顔して廃墟探索なんて出来たもんだ」

「もう終わったことを引きずっても仕方ないだろう。」

溜め息交じりに答える。松本は怒りを込めて廃墟の壁を思い切り蹴ると、家のある方に向かって歩き出した。

三日前、ちょうど俺の十七歳の誕生日の日。俺と松本の友達だった吉木が死んだ。何のことは無い、封鎖地域から脱走を企てて、警備の兵隊に銃殺されたのである。頭を打ち抜かれて即死だった。

俺は、吉木の死について、正直なところ松本のことを恨んでいた。吉木は封鎖地域、通称チエルノブイリからの脱走に反対していたのである。溜まり場の喫茶店で脱走計画を立てる松本に対して、彼はいつも嫌味そうな笑いを浮かべていた。

「逃げ出せるわけがないさ、それにお前は外に放射線をばら撒きたいのか？」

原発事故レベルの放射線になると、被曝した人間は放射化して放射線を出すようになるらしい。つまり、今俺たちが外に出れば沢山の人が被曝することになるのだ。本当かどうかは分からない。もしかしたらただ俺たちを隔離しておくだけの嘘かも知れない。だって、国のずさんな管理の所為で起きた原発事故をよく知る人間がマスコミの取材なんて受けたら、面倒だから。

けどそんなことはどうでもよくて、胎児なのは封鎖地域を囲うフェンスにはいつだって触れればすぐ死ぬ程の電流が流されている上に、ゲートの辺りにはいつでも逃げ出そうとした住民を殺せるだけの兵隊と兵器が配備されていると言うこと。彼の言う通り、逃げ出せるわけが無いのだった。

「そんなのやってみなきゃ分かんねえだろ」

吉木が死ぬ前日、松本はキレてそう叫んだ。

「放射能なんて知ったこっちゃねえよ、俺たちを見殺しにしてる外の人間なんて被曝して死んじゃまえばいいんだ！ 中畑の野郎もぶつ殺してやんなきゃ気が済まねえ、首相の癖に俺らを見捨てやがって！ それとも何だ？ お前は外の人間を庇うつもか？」

「やってみなきゃ分かんねえ、か。お前がそう思うならそれでいい

さ。」

吉木は左の口角を上げて笑うと、そのまま自分の飲んだコーヒードも払わずに喫茶店を出て行った。そして翌日、ゲートを突破して逃げ出そうとして殺されたのだ。兵隊を相打ちで一人殺してから死んだらしい。武器は、何のことは無い、普通の包丁だった。

「ほら見る、無理だった。」

それが、吉木の最期の言葉だった。

「あいつは逃げ出そうと思ってても無駄だつてことを実証したんだろう、なのにさらに熱くなつてどうするんだ。」

松本は黙ったまま速いスピードで歩いていった。松本は冷静さに欠け、しばしば暴走する癖がある。何かとんでもないことをやらかしそうで少し心配だった。

仕方ない、と思う。

いつも醒めた目で周りを眺めていた吉木や、正直これ以上状態が悪化しないのであればこのままでいいと思っっている俺とは違って、松本には立場と言う物があつた。チェルノブイリの若者たちのリーダーである。行動的で頼れるリーダーとして慕われる彼は、常に何かをしている必要があるのだつた。

「そう言えば」

松本が歩くスピードを少しだけ落としながら言った。

「河原の小屋に住んでいるじーさんがいるだろ？」

「ああ、五十嵐さんのことか？」

秋川さんは、十年前爆発を起こした原発の割と近くを流れる川の畔に小さな小屋を建てて住んでいる七十歳くらいの男性だ。奥さんは事故の直後、放射線の影響で死んだ。

「五十嵐さんがどうしたんだ？」

「ドニム飲むのやめたんだってさ。もう長く無いだろうな。」

「…そう、か。」

余り付き合いの無い人だったけれど、こうして一人、また一人と

いなくなつて行くのは何となく寂しかった。

事故の後処理で、当時大人だった人たちは男女問わずほとんどが駆り出されて放射線にやられて死んだ。俺の母や、松本の両親、吉木の両親も例外ではない。後に残ったのは、まだ力仕事が出来る年齢では無かった子供たちと、同じく力仕事が出来る年齢では無かった老人たち。五十嵐さんは当時六十歳だった上に、腰を痛めていたから生き残った。それが幸せなことなのかどうかは俺には分からないけれど。

秋が深まったチエルノブイリは、成長するままに放置された巨大な街路樹の落とす葉に覆われていた。それを、音を立てて踏みしめながら歩く二人。

終わつた世界は、もう一度終末に向かって歩んでいるかのようにだった。

第一章「Mistopia」1（後書き）

四話まで書きだめているのでちよいちよい出して行こうと思います。

とりあえず「君」一人目は松本。

第一章「Missstopia」2

家について今に入ると、まず壁に掛けられた時計に目をやる。時計の針は十二時を少し過ぎた辺りを指していた。

時刻を確認し終わると、その下のメーターに視線をずらす。メーターの針は相変わらずゼロから一番遠い目盛を指してピクリとも動かなかった。ガイガーカウンターが振り切れる程の強い放射線。普通なら生き残れるはずもないような環境で俺達の命を繋ぐのは、ドニムと言う錠剤だった。引き出しを開けて、中から錠剤のシートを取り出す。シートにはピンク色のハートが印刷されている。

「愛のしるし、か。」

そう呟いてみたものの、それが愛のしるしではなく命のしるしであることは一目瞭然だった。こんな世界で愛なんて何の役にも立たない。このちつぽけな錠剤はまるでノアの方舟のようだった。

その方舟を口の中に放り込んで、水道水で流し込んだ。放射性物質で汚染されているかも知れない水道水で。方舟は水に押し流されてゆく。

どういう仕組みかは知らないけれど、定期的に支給されるこのドニムと言う薬を飲めば被曝していても放射線障害が出ることは無かった。今までと全く同じように暮らしてゆける。全てはもう元通りにならないけれど、人間自身だけは今まで通りで。

母が死んでいなくなったこの家は、一人で暮らすには少し広かった。首に吊るしたままになっていたホルガを今のテーブルに置いて、ソファに身体を沈める。昔はあれ程心地よかったクッションも今はもう潰れて、ただ尻が痛いだけだった。

「次の配給が来た時にでもソファ頼もうかな……。」

配給トラックに欲しいものを書いたメモを貼り付けておけば、次に来る時に大概の物は配給されるのだ。牢獄のようなチェルノブイリにおける唯一の特権、と言ってもいいだろう。ただ、テレビや電

話、パソコンのような外部と繋がる事の出来る物は一切貰えない。物理的だけではなく精神的にも完全に隔離されているのだ。

だから、チエルノブイリの住民が一人銃殺された程度、外の人間にとつては何とも無いことなのだろう、と思う。何のつながりもない人間が一人死んだ程度で何が変わるということも無く日々を漫然と過ごしているに違いない。けれどそれは酷い話だった。どちらも同じ人間だと言うのに。

とは言え、それを何とかしようと言うような気力はこれっぽっちも湧かないのだった。「酷い話だ」とは思う。けれどだから何ってことは無い。別に何も感じないのだ。

吉木が死んだ時は少し哀しかった。そして松本を少しだけ恨んだ。けれどやっぱりそれは俺の心にとつてさかむけ程度の痛みでしかないのだった。だって、俺はこうして生きてるだろう？

だから俺は、今のところはこの生活に満足していると言って差し支えないのである。

「昼、何食べよう。」

ソファから身体を起こしてキッチンの冷蔵庫を開ける。中には大したものが残っていなかった。どうせそれ程空腹でも無いし、スクランブルエッグでも作って食べよう。そう思つて卵を取り出した。

今日の配給、忘れると酷いことになるな。三日に一回の配給。前に一回逃したことがあったのだが、その時は本当にひもじい思いをした。夕方に配給があるから、と昼食で冷蔵庫の中の物を使い切つたまま寝てしまい、配給に間に合わなかったのだ。今なら笑い話だけれど、その時は近所を回つて「卵一個下さい、次の配給の時返しますから」と必死にお願いした。一日卵一個とジャムの生活は割と過酷だった。

「よし。」

上手く料理出来て満足する。料理、と言う程でもないけれど。チエルノブイリ地区の中でスクランブルエッグを作らせたらきつと俺

が一番だと思う。綺麗な黄金色、絶妙な具合に混じる狐色。簡単に真似できる芸当では無い。

昔、まだ俺が小さな子供だった頃、父に教えてもらった。まだ危ないからと言って実際にやらせては貰えなかったのだけれど、様々なコツを学んだ。父は他の料理は何もできないけれど、卵料理だけはプロ並みの腕を持つ人だった。

父は家族を愛する人だった。けれど、余りに忙しすぎる人だった。俺が10歳になった時、両親は離婚した。俺は母に引き取られてこの地区に引っ越して来て、そして事故に巻き込まれたのだった。

今となってはもう、どうでもいい話だけれど。大切なのは今から生き延びていくこと、それだけだから。

質素な昼食を終えると、俺は本を開いた。桐生夏生と言う日本の作家の小説だ。この国は日本人の移民が作った国で、用いられている言語も日本語だ。だから日本の小説も読むことが出来る。俺は日本人の感性が好きだった。廃墟のような退廃的な物を愛する感性。そう、例えばチェルノブイリのような。

物語が佳境に突入し主人公が過去の記憶を取り戻した時、インターホンが来客を知らせた。本を閉じて玄関へと向かう。扉を開けると、そこにいたのは昼前に別れたばかりの松本だった。

「どうしたんだ？」

「ちよっとイーハトーヴアで話し合いすっから来い」

「分かった、大体何の話かは予想がつくけど。」

どうせまたチェルノブイリ脱出の話だろう。俺は興味無いんだけれど。

喫茶イーハトーヴアはこの家から十分程バイクを走らせた場所にある。

配給に頼るチェルノブイリ内で喫茶店などやっていける筈もないのだけれど、国に認められた最低限の娯楽施設は必要な物資を別に

配給を受けていて、その最低限の娯楽施設の一つがイーハトーヴアだった。この辺りには他にもカラオケや居酒屋、バーなどがあるけれど、俺たち若者が集まるのは大体喫茶イーハトーヴアだ。

けれど、俺と生前の吉木はイーハトーヴアで一緒にくつろいでいながら、それでも彼らから一歩離れたところにいた。吉木はみんながわいわいと騒いでいるのを嗤いながらコーヒーを飲んでいるような奴だったし、俺はみんながわいわいと騒いでいるのについていけずに溜め息をついて紅茶を飲むような奴だった。だから俺がその話し合いとやらに呼び出されたと言うことは、それだけ重要な話し合いだ、と言うこと。

きつと、脱走するかどうかの最終決定をするんだろうなあ、と考えると溜め息が止まらなかった。

第一章「Mistopia」2（後書き）

説明乙。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7397p/>

チェルノブイリと君と。

2010年12月28日23時08分発行